

平成18年度 第2回滋賀県社会教育委員会議での講演概要

日時：平成19年3月15日(木)

場所：滋賀県農業教育情報センター

演題：「湖国のめざすべき図書館について」

講師：毎日新聞大阪本社総合事業局企画開発部長(前・大津支局長)塩田敏夫氏

講演の概要

今日、私がこの場に立っていることに運命的なものを感じています。ほんの数日前、県立図書館長の前川恒雄さんから手紙をいただいたからです。私は図書館について話すことなどお知らせしていませんでした。手紙には、前川さんの著書「図書館員を志す人へ」の復刻版が同封されていました。第5版です。1984年秋、長崎の純心女子短大での講演をまとめたものですが、前川さんの図書館づくりにかける思い、図書館が文化の基底をつくるという思いが見事に表現されていました。今、図書館立県といわれてきた滋賀県が大きな曲がり角を迎えています。前川さんが命がけて手渡してくれた精神のバトンをどう受け継いでいけるかが問われています。前川さんが私の背中をポンと押してこの場に立たせてくれていると感じています。ここで、もう一度原点に帰って、図書館とは何か、滋賀県の図書館のめざすものは何かについて議論してほしいを願って今日はやってまいりました。

皆さんはご存知だとは思いますが、前川さんが1980年に県立図書館長に就任されたことが滋賀県での図書館の歴史の扉を開くこととなりました。前川さんは東京都日野市でたった一台の移動図書館からスタートし、次々と分館を作り、最後に本館を完成させました。「地域の人から求められる資料を、どんなことをしてでも100%手に入れて提供する」という固い信念を抱いておられました。100年間停滞したといわれた図書館の歴史を切り開きました。その前川さんが30年近く前、当時は図書館がわずか数館しかない全国的にも遅れた県であった滋賀県にやって来たということから、滋賀県の図書館物語が始まったのです。当時の知事の武村正義さんが図書館で文化を築こうと決断し、東京から前川さんを招いたことが本当に大きかったと思います。市や町が図書館をつくりやすいよう人の手当てと財政的な支援をする仕組みをつくったのです。

前川さんは理想に燃える図書館長を全国からどんどん引っ張ってこられました。やはり、人なんです。そして、予算。準備室開設段階から館長が就任するのが滋賀の特徴です。それこそ、北海道から九州までさまざまが人材が集まってきました。そうした図書館長がそれぞれの地域で住民と一体となった実践を重ねてきました。そういう歴史が滋賀県にはあることを私は滋賀県に移り住むまで知りませんでした。今では、滋賀県は県民一人当たりの図書貸し出し数が全国1になるなど全国有数の「図書館立県」なっていますが、先ほど申し上げたように今や大変な状況になっていると言わざるをえません。せっかく蒔いた種が芽吹き、根を下ろそうとしているのに本当にもったいないことだと思えます。

ずばり言いますと、やはり、人と予算、それをきっちりしなければ前に進めない状況にあります。自治体としての滋賀県は非常に厳しい財政状況にあります。しかし、こういう時だからこそ文化を育てる図書館を、命を育てる図書館を、逆に増やさなければならぬと思います。そのぐらいの覚悟で、図書館のことを大事にしなければ、今まで30年間近く築き上げてきたものをだめにしてしまう。財政難を理由に、県立図書館は生命線の図書購入費をここ何年も1000万円単位で削減されています。県内のある小さな自治体では今まで年間1000万円近くあった図書購入費が100万円確保できるかどうかというところまで追い込まれています。財政難のこういう時こそ、県が、県教委が、それぞれの教育委員会が、県立図書館が、きっちりスクラムを組んで、県民一人ひとりを大事にし、命を大切にするために財政状態の厳しいところをきちんとフォローするという仕組みを新たに創る必要があるのではないのでしょうか。このような時代だからこそ、図書館政策をきっちり見直す必要があります。そうしなければだめになると思います。それだけは申し上げておきます。

全国から理想に燃えて集まってきた図書館長たちがこの春、定年退職します。この数年、毎年人が変わろうとしている。そういう人の面でも、今、非常に大事な時です。精神のバトンをどうつないでいくのが大きな課題です。

滋賀県でも市町村合併がどんどん進んできています。数字的には、滋賀県の図書館はトップクラスで、いい数字を出していると思いますが、実際の中身を見極める必要があります。能登川図書館の才津原哲弘館長からお聞きした話ですが、中学校区内の歩いて行ける範囲に図書館が必要だということです。つまり、本当に必要な人に本当にきちんと本が届き、本や資料が身近な図書館にないだめだと。その理想に向かい、50年後、100年後を見据えた図書館政策が今こそ求められていると思います。知事が代わってくらいで根本が変わってはならないのです。図書館作りは地域をどうつくっていくか、この国の形をどうするかにも深くかかわってくるテーマだと思います。住民自治、民主主義の原点を考えるうえでも大切です。人は地域で生まれ、死んでいきます。素晴らしい図書館が身近にあったらどんなにすてきなことか。子育てなど人が生きていくことに深くかかわり、住んでよかったねと言える町づくりにもつながっていくと思います。

今、勝ち組、負け組という言葉が当たり前のように使われ、強い者、金を持っているものが何をしてもいいという風潮があります。年間の自殺者が3万人を超えていることが象徴的に示しているように思います。今、大学教育を見てもグローバル化の中で競争に勝ち抜くための教育が優先され、生きるための教養、いのちを大切にしようという基本が置き去りにされているように思えてなりません。そうした中で、「自殺したくなったら、図書館へ行こう」という言葉がこの滋賀県の能登川図書館から生まれました。私はそのことの意味を深くかみしたいと思います。人はそれぞれに深い悩み、苦しみを抱きながら生きています。それでもなんとか生きていきたい。そんな願いを持って図書館に足を運ぶ。才津原さんは図書館はそうした生死にかかわるところで懸命に生きようとしている人にこそ向かい合う場ではないかと考え、いのちといのちが響きあう図書館づくりを目指して地道な実践を重ねてきました。

私自身も競争社会の中で生きてきましたし、心がスカスカになった時に会ったのが図書館でした。能登川図書館だったのです。その図書館で私自身の心が本当に癒されたというのが実感なんです。今でも休日には通っていますが、だんだんと図書館のすごさがわかってきました。ひとつには選書のすごさです。書棚の前に立つと、心からうきうきしてくるのです。次々と興味ある本を取り出したくなるのです。本の選び方、並べ方まで職員の愛情を感じることができるのです。「ありがとう」という言葉が自然に口に出てくる場に出会って本当に幸せだと思います。能登川図書館では、心に病を得た人が「やっと居場所が見つかった」という人と出会うことができました。ある若い女性はこの図書館と出会い、図書館司書を目指して実際に4月から滋賀県の図書館で働き始めます。次々といのちの物語が生まれているのを実感しています。

繰り返しになりますが、今、滋賀県の図書館は大きな曲がり角を迎えています。豊かさとは何か、命を大切にすることとは何かを深く考えたいと思います。その意味でも図書館をこれからどうしていくのかは本当に大切なテーマだと考えています。

講演：「湖国のめざすべき図書館について」毎日新聞大阪本社(前・大津支局長)塩田敏夫 氏

